

# 「河童」のイメージの変遷について

— 図像資料の分析を中心に —

小澤 葉菜

## 目 次

はじめに

1. 先行研究の整理と研究方法
    - 1-(1) 先行研究の整理
    - 1-(2) 問題の所在と研究方法
  2. 近世の文献資料にみる「河童」イメージ
  3. 図像資料にみる「河童」イメージ
    - 3-(1) 18世紀の図像資料について
    - 3-(2) 19世紀から20世紀の図像資料について
- 結びにかえて

## はじめに

「河童」と聞けば、おおよその人はその容姿や性格の特徴をイメージできるのではないだろうか。一般的にイメージされるのは、体が緑色で頭に皿と呼ばれる部分があり、甲羅を背負い、口がくちばしのように、相撲をとることや胡瓜を好むというような特徴であると思う。また逆に、そういった特徴を持ったものは何かと問われれば、「河童」であると答えることができるのではないだろうか。

いわゆる妖怪のひとつとして数えられる「河童」だが、近年では、生活雑貨・飲食店・町おこしのマスコットキャラクター、テレビCMなどにも登場し、注意していれば日常で「河童」に出会う機会は多い。こうした例は、みなキャラクターとして愛らしく、本来の妖怪としてのおどろおどろしい気配は微塵も感じられない。だが周知のように、「河童」には、水中に人や馬を引きずり込もうとしたり、内臓やその一部と考えられていた尻子玉を抜いたりして人を溺死させるといった、凶暴な一面も確かに伝えられている。「可愛くなければキャラクターとしては売れない」というのは当然のことであるが、では、「河童」はどのような変遷をたどり現在の一般的なイメージに至ったのであろうか。

本稿では、「河童」へのイメージが直にあらわれる図像資料を中心に、文献資料も合わせつつ、そのイメージの変遷をたどり、どのようにして「河童」イメージが形成されてきたのかを明らかにすることを目的とする<sup>(1)</sup>。なお、呼称や形態は地域により多種多様であり、ひとくちに「河童」としてしまふのは相応しくない面もあるのだが、本稿では便宜上それらを全て含めた意味で「河童」を用いることにする。

構成としては、第1章において先行研究の整理と、問題の所在を明らかにし、第2章では主に近世の文献資料を用いて、「河童」がどのように説明されてきたのかを掴む。第3章では、図像資料に注目し、「河童」のイメージがどう変化してきたのかを明らかにし、最後に全体の総括をして結ぶ。

## 1. 先行研究の整理と研究方法

### 1-(1) 先行研究の整理

「河童」に関する伝承は全国的に存在し、そのためか起源について追求するものも多い。たとえば折口信夫は、「河童」は、もとは主に農村に水の恵みを与える水の神であったととらえている<sup>(2)</sup>。柳田國男も、「河童」は人の信仰の薄れにより零落してしまった水の精霊であったと考えた<sup>(3)</sup>。「河童」が持とうとする、人間との様々な交渉も、その信仰の衰えの過程をあらわし

ているのだという<sup>(4)</sup>。また、神野善治は、大工が神社や寺などを建築する際、人手が足りないなどの理由で人形を作り、役目を終えた人形を川に流したところ「河童」になったという起源譚を、大工がかつて建築儀礼として人形を祭ったことに由来するのではないかと論じた。同時に、こうした一種の起源譚が西日本に多いことも指摘している<sup>(5)</sup>。この論を小松和彦は発展させ、「近世に登場した河童のイメージが生成されるにあたって、もっとも重要な役割を果たしたのは、農民とは異なる生業を営み、しかも賤視・差別されていた「川の民」であった」と述べている [小松 2000: 210]。「河童」の人形起源譚と、近世の「非人」の起源譚との内容がほぼ同一であり、そこへカワウソやスッポンや猿などの動物的イメージが加わって造形されたのが「河童」だと指摘しているのである<sup>(6)</sup>。

このほかにも、「河童」は川の渦そのものであるとか<sup>(7)</sup>、近世初期の禁教下において、山中に隠れながら布教をしようとしたキリシタン宣教師の存在が、「河童」のイメージ形成に与えた影響もあるのではないかなど<sup>(8)</sup>、さまざまな指摘がある。石川純一郎は、昔大陸から九州に渡来してきた一族が、球磨川に住みついて九千匹もの「河童」になったのだという伝承にも注目した<sup>(9)</sup>。

しかしこれらのうちどれかが確かな起源だというものはなく、また逆にこれは違うという確証のあるものもない。どれもが、「河童」のイメージを形成する上でのひとつの要素でしかなかったのではないかと考えられる。近世において「河童」が盛んに描かれはじめ、次第に一般的なイメージが作られていくのであるが、時代や土地によってさまざまな「河童」がいたのもまた事実であろう。

## 1-(2) 問題の所在と研究方法

以上は、主に伝承や文献資料から「河童」を探った研究である。近世において、「河童」は本草学者の研究の対象として書物の中に、また娯楽の対象として錦絵の中などにさまざまに描かれた。しかし、それら残された多数の図像資料を中心に扱った研究はあまり見受けられない。その中でも中村禎里

は、「河童」に関する文献・図録集である『水虎考略』（古賀侗庵編、文政3（1820）年刊）に掲載された絵の出典やモチーフなどを詳しく考察したが<sup>(10)</sup>、その範囲は錦絵までには及ばなかった。

本稿では、「河童」に対して日本人がどのようなイメージを形成してきたのかを探るために、文献資料に加え、近世から現代までに描かれた「河童」を通して、時代の流れを追いながらそのイメージの変遷をみていくという方法をとりたい。また、海外にも「河童」と性質が似た水辺の妖怪がいるようであるが、本稿では日本における「河童」のイメージの変遷を中心にとりあげることを、はじめにお断りしておく。

## 2. 近世の文献資料にみる「河童」イメージ

それではまず、主に近世の文献資料に注目し、「河童」がどのように説明されてきたのか、その概要をとらえることにしたい。

扱う資料は、明確に「河童」のことを指しているもののほか、図の掲載がないものにも限り、『日葡辞書』（慶長8（1603）年）、『大和本草』（宝永6（1709）年）、『書言字考節用集』（享保2（1717）年）、『下学集』（元和3（1617）年版）、『物類称呼』（安永4（1775）年）、『本草綱目啓蒙』（享和3（1803）年）などの辞書・事典類からそのイメージの変遷をさぐることにする<sup>(11)</sup>。

これらの辞書・事典類は、どこでどのような資料・手段を使って作成するかによって、「河童」に対する認識にもかなりの違いが出るものだが、それはそれで興味深い。これらは出版にあたり、手にする人間の知的好奇心を満たしたり、新たな知識を与えたりするものであるから、掲載されている事柄については、それに対して興味を抱く人間が多く、少なくとも生活の中で触れる機会のある言葉ということを示すのではないだろうか。そして、情報量が多ければ多いほど、その時代の人間の関心や好奇心が強いということであらわしているものと思われる。ここでは、時代が進むにつれて「河童」についての情報量が増加することについても注目したい。

まず、『日葡辞書』には「Cauaró カワラウ（河朗・河童）猿に似た一種

の獣で、川の中に棲み、人間と同じような手足をもっているもの」とある〔土井他 1980：112〕。『日葡辞書』は、日本語をポルトガル語で解説した辞書で、日本イエズス会により慶長8（1603）年に長崎で刊行された。これによると、当時の長崎の日本人にとって「河童」は、実在する動物としての認識があったといっても過言ではないようである。それも、猿のイメージが強調されている。この辞書にはこれ以上のことは記されていないが、辞書に掲載するほどということは、「河童」についての広い認識があり、日常的に「河童」が会話に登場することが多かったということかもしれない。

それから約100年後の『大和本草』（貝原益軒、宝永6（1709）年）では、「河童<sup>かはたろう</sup>」については、「5～6歳の小児のようであること、これに会うと精神が錯乱すること、人との力比べを好むこと、そして時には水中に人を引き込んで殺すこと」などが記されている<sup>(12)</sup>。

その8年後の享保2（1717）年刊『書言字考節用集』では、「水虎<sup>カハワツハ</sup>」は、「時珍によると、三、四歳の子供のようで、甲羅は鮫鯉のようである。常に水に沈んでいて、膝を出して人に見せている」とある。冒頭の「時珍」とは『本草綱目』（1596年刊）の著者李時珍のことであり、『本草綱目』は、約1900種もの動植物、鉱物が分類、整理され記載されている中国の代表的な本草書である。この書物は日本でも版行されていたため、それを参考にしていたことがわかる。詳しくは次章で述べるが、ここで引用した文言は、『和漢三才図会』（寺島良安、正徳2（1712）年序）にも取り上げられている。また続いて、「川童<sup>カハワツハ</sup>または川郎<sup>カハラウ</sup>ともいい、土地の人は年経た<sup>かわうそ</sup>瀬<sup>カワウソ</sup>がなるものだ」とある。この「土地の人」がどこの人を指すのかは定かではないが、年をとった瀬が「河童」になるという伝承は古くからあったようで、『下学集』（文安元（1444）年序）に「瀬<sup>かわうそ</sup>老いて河童<sup>かはらふ</sup>になる」という記述があることは中村禎里も指摘するところである<sup>(13)</sup>。『下学集』はその後も版が重ねられ、元和3（1617）年版上巻には「瀬<sup>カワウソ</sup>老<sup>ガワラウ</sup>テ河童ト成ル」とある〔山田 1968：62〕。送り仮名や濁点などの違いは見受けられるが、ほぼそのままである。『書言字考節用集』から60年ばかり後の方言辞書『物類称呼』（越谷吾山、安永4（1775）年）では、「河童」の地方名と、特徴や性質が紹介されている。（下

線 [性質的イメージ]・波線 [外見的イメージ] 筆者)

河童がはたらう 畿内及九州にて、がはたらう、又川のとの又川童<sup>かはつは</sup>とよぶ、九州に多し、わきて筑後の柳川尤多し、周防及石見又四国にて、えんこうといふ、

土佐の土民はぐはたらう、又かだらう、又えんこうともいふ、其手の  
肘よく左右に通りぬけて滑なり、猿猴に似たるが故に、河太郎もえん  
こうといふ、

東国にかつばと云、川わつばのちぢみたる語也、小児をしかるにもかつ  
ばともいふ、越中にてがはらと云、伊勢の白子にて、かはら小僧とい  
ふ、

其かたち四五歳ばかりのわらはのごとく、かしらの毛赤うして、頂に  
凹なるさら有水をたくはふる時は、力はなはだつよし性相撲を好み、  
人をして水中に引入れんとす、或は恠をなして婦女を姦姦す、其わざ  
はひを避るには、猿を飼にしかずとなん、 [神宮司序 1970：480]

18世紀後期には、「河童」の性質・形状に対する具体的な説明がなされるようになった。この時点ですでに、頭に皿があることや、皿に水が入っているうちは力強いこと、相撲を好むことというような現在でもよく知られる「河童」が形作られていたことがわかる。それから、『本草綱目啓蒙』（小野蘭山、享和3（1803）年）にも「水虎（カツパ古歌江戸奥州）」にはじまる20の地方名とともに、「河童」の特徴が詳しく記述されている<sup>(14)</sup>。小野蘭山は江戸時代後期の本草学者で、自らの足で日本各地を歩き、動植物や鉱物を採集するほどの研究熱心な人物であった。「河童」についても自らが集めた情報も多いだろうと思われる。（下線 [性質的イメージ]・波線 [外見的イメージ] 筆者）

諸州皆アリ。濃州及ビ筑後柳川辺尤多シト云。凡ソ旧流大江辺、時ニ出  
テ兒童ヲ魅<sup>バカ</sup>シテ水ニ沈マシメ、或ハ人ヲ誘ヒ角力シテ深淵ニ引入。其体

甚粘滑ニシテ捕ヘ難シ。<sup>ヘクソカツラ</sup>女青藤ヲ以、手ニ纏ヘバ、角力勝ヤスク捕ヘ易シト云。角力シテ悩サル、者ハ、<sup>シキミ</sup>莽草ヲ用テ治スルコト大和本草ニ見エタリ。性好テ<sup>キウリ</sup>胡瓜及<sup>ツルシガキ</sup>白柿ヲ食フ。白柿三箇許ヲ食フトキハ能酔。<sup>アサガラ</sup>麻糍及<sup>トウキビダンゴ</sup>び其炭ヲ忌、<sup>もしひと</sup>蜀黍糕ヲ惡ム。若人口ニ鉄物ヲクワヘ居バ、水ニ引入ルコト能ハズト云。其形状ハ人ノ如ク、両目円黄、鼻ハ突出シ、<sup>サル</sup>獼猴ノ如シ。口ハ大ニシテ狗ノ如ク、齒ハ亀齒ノ如ク、上下四牙尖レリ。頭ニ短髮アリ、色赤シ。額上ニ一孔アリ、深サ一寸。上ニ蓋アリテ、<sup>ハライタ</sup>蛤ノ如シ。面ハ青黒色、背色ハ亀甲ノ如ク、其堅キコトモ同ジ。腹モ亀版ノ如シテ黄色ナリ。左右脇下ニ一<sup>ミヅカキ</sup>道ノ<sup>ミヅカキ</sup>堅条アリ、柔軟ニシテ白色ナリ。コノ処ヲ執ルトキハ動クコト能ハズト云。手足ノ形ハ人ノ如ク、青黒色ニシテ微黄ヲ帶。四指短クシテ爪長ク、指間ニ蹠アリ。手足ヲ縮ルトキハ皆甲版ノ間ニ藏ル、コト、亀ニ異ナラズ。手足ノ節前後ニ屈スルコト人ニ異ナリ。[小野 1991：183-184]

『物類称呼』から30年ほど経った19世紀初頭には、「河童」に関する情報量が著しく増加し、漠然としていた「河童」イメージがより鮮明になっていることがわかる。形状・目・鼻・口・色・頭頂部の特徴・甲羅・手足などの身体的特徴が詳しく述べてあるだけでなく、その中には子供を化かしたり、角力（相撲）を人間に挑んだりして水中に引き込むこと、胡瓜を好むこと、シキミやアサガラ・鉄物を嫌うことなど、伝承とも深く関係する内容も含まれており、広い範囲でこういった特徴が流布していたことがうかがえる。

### 3. 図像資料にみる「河童」イメージ

次に、描かれた「河童」に注目し、時代を追いながらそのイメージの変遷をたどりたい。ここで「河童」の図像資料だと判断した基準は、タイトルや文中に「河童」あるいは、「河童」の地方名とされる呼称が含まれていること、呼称が不明の場合、胡瓜と一緒に描かれる、相撲をとっている、頭に皿があることなど、「河童」としての特徴が複合的に描かれていることなどである。

図には通し番号と、用いられている「名称」を記した。まず3-(1)では、18世紀に描かれた図像資料について触れ、3-(2)では19世紀から20世紀にかけて描かれた図像資料について述べる。

### 3-(1) 18世紀の図像資料について

管見の及ぶ限りでは、日本ではじめて「河童」について図像を伴って紹介したのは、江戸時代の絵入り百科事典『和漢三才図会』（寺島良安、正徳2（1712）年序）第40巻であろう。良安は大阪の医師であり、また本草学を学んだ人でもあった。本草学は、もともとは医薬に役立つ動植物や鉱物を研究する学問で、中国において発達し、日本へは奈良時代に伝えられたようだが、江戸時代初頭の『本草綱目』の渡来を契機に、ますます盛んになった。以前から行われていた、中国の動植物・鉱物に対応する日本の動植物・鉱物を研究することに加え、日本国内の産物にも目を向ける動きがはじまったのである。その重要な転換が起きたのが18世紀のことだと香川雅信が指摘している。以下、香川の論をもとに、日本における本草学の展開過程を素描していく<sup>(15)</sup>。宝永6（1709）年には、貝原益軒により、日本の様々な動植物・鉱物を独自に分類し作成した『大和本草』が刊行された。文献中心だったそれまでの本草学と違い、『大和本草』は、益軒自らが対象物を観察し、その形態を描写したものだ。それから、享保19（1734）年には、徳川吉宗の政策の一環として、殖産興業を推進する目的で全国各地の特産物調査が行われている。この調査によって、それまで医学的・薬学的に必要とされていた本草学に、経済的価値を見込んだ「物産学」が付加されるようになったのである。宝暦7（1757）年には、国学者でもあり、物産学者・本草学者でもあった平賀源内らにより、湯島で初の「薬品会」が開かれた。薬品会には、薬の原料となる動植物・鉱物などのほかにも、各地の物産や珍品も並んだ。このような流れで、学者、一般大衆問わず、日本国内のありとあらゆるものへの興味関心から、それらの詳細を描写、記述した事典や図鑑などの刊行も盛んに行われた。「数多くものを列挙し、記述するあり方それ自体が、この時代の特異な知と快樂のスタイルとして、文化のさまざまな局面において見ら



れるのである」との指摘があるように〔香川2005：135-136〕、『和漢三才図会』も『大和本草』に続いた18世紀の一種の流行の先駆けのひとつだったのである。そしてその流れは動植物など実在するものだけでなく、「河童」のような存在自体が怪しく、しかし各地で語られることが多い正体不明のものまでをも、研究と好奇の対象として飲み込んでいったと思われる。

さて、話を『和漢三才図会』に戻すと、「河童」はここでは「川太郎（一名川童<sup>かわろう</sup>）」として紹介されている（図1）。この「川太郎」の内容を要約すると、西国や九州の谷や池、川に多くおり、十歳くらいの子供の大きさで、裸で立って歩き、人語を話す。髪や毛は短く少なく、頭頂部には凹みがあり、ひとすくいの水を入れることができるが、その水がなくなると力尽きる。手<sup>う</sup>腕は左右に通じ抜ける。相撲を好み、鉄物を嫌う。畑の瓜や茄子を盗む。牛馬を水中に引き込み、尻から血を吸い尽くす。もし人が川太郎を捕えても、後の祟りを恐れて放す、などがある<sup>(16)</sup>。図をみると、全体が猿を連想させる風貌である。ただ猿と異なるのは、頭に窪みがあることと、はっきりと示されているように手の指の間に水掻きがあることである。山間の溪谷に多くいるという情報と、人間に似た身体的特徴から猿をイメージしたのは自然のことと思われる。『日葡辞書』でわかるように、1600年のはじめに、すでに長崎では猿に似た「カワラウ（河朗・河童）」が確認できるため、上記の特徴に加え、猿のイメージの情報を良安が得ていてもおかしくはない。この「川太郎」であるが、『和漢三才図会』第80巻の「豊後国の土産」の中に、碁石や水晶などに混ざって「川太郎〔河獣。小児の如し〕」とあるのはまた興味深い〔寺島 1989：155〕。それほど、当時の豊後では「川太郎」が身近な存在として考えられていたのである。

また、「川太郎」の項目のひとつ前には、「水<sup>すい</sup>虎<sup>こ</sup>」がある（図2）。これも『本草綱目』からの引用で、次のようにいうとある。「水虎は『襄<sup>じょう</sup>沔<sup>べん</sup>』の注によれば、中盧県（湖北省襄陽県西部）



図1 「川太郎」



図2 「水虎」

に凍水そくすいがあつて汚水べんの中に注いでいるが、そこに三、四歳の小児のような動物がいる。甲は鮫鯉こうらりょうりのようで矢で射てもつきささらない。(中略) 膝頭は虎の掌爪に似ている。つねに水にもぐっていて膝を出して人に見せる。(後略)」とある〔寺島 1987：158〕。図をみる限り、「川太郎」とは似ても似つかないが、水の中にいる「三、四歳

の小児」という特徴が印象的だったのか、この後「水虎」という言葉は文献にたびたび登場する。しかし、日本における「河童」は、この水虎とはあまりにかけ離れていたためか、良安の水虎像は定着しなかったようである。良安自身も、「水虎の形状をみるとわが国の川太郎の類のようであるが、異同がある。このような動物が果しているかどうか未だ聞いたこともない」と冷静に判断している〔寺島 1987：158〕。図をみる限り、構図や体の特徴はとらえているが、情報が全くない表情は、小児をイメージして笑顔で描いたのかもしれない。良安自身は無理に「河童」を水虎にあてはめることはしなかったが、日本における「河童」を水虎にあてはめようとした本草学者なども多かったと思われる。しかしそれは、良安の水虎イメージを伴わず、「水虎」という漢字のみを「河童」イメージにあてはめたものだった。実際、この5年後(享保2(1717)年)に刊行された『書言字考節用集』では、内容は『本草綱目』と全く一緒だったが、すでに「水虎」と書いて「カハワツハ」と読ませていた。挿絵のない『本草綱目』を参照したのか、挿絵のある『和漢三才図会』を参照したのかは不明であるが、どちらにしても、わずかな特徴の合致だけで「河童」は水虎にあてはめられてしまったようである。

18世紀は、『和漢三才図会』の「川太郎」のように、イメージに猿が含まれていると思われる図が多いのが特徴である。『日本山海名物図会』(平瀬徹斎編著/長谷川光信画、宝暦4(1754)年)においては、「河太郎」同士が相撲をとっている場面が描かれている(図3)。ここでは、「河太郎」は豊後国の産物として紹介されている。体の様子や集団でいるところからみても、

猿がモデルと思われ、添書きにも以下のようにある。(下線筆者)

豊後河太郎 形五六歳の小兒のごとく、遍身に毛ありて猿に似て眼するどし、常に濱邊へ出て相撲を取也、(中略) 水中へ引入れて其人を殺す事あり、河太郎と相撲を取たる人は、たとへ勝ても正氣を失ひ、大病をうくと云、志きみの抹香水にてのましむれば、正氣に成と也、河太郎、豊後國に多し、其外九州の中所々に有、關東に多し、關東にては河童と云也、[神宮司庁 1970 : 484]



図3 「河太郎」(一部)

図は猿に似て可愛らしいが、性質は甚だ恐ろしい。人に崇ったり、とり憑いたりという性質をこの時代の「河童」はまだ残している<sup>(17)</sup>。「河童」は関東にも多くいて、「河童」と書いて「かはわらは」と読むとあり、九州だけでなく関東でも「河童」伝承の存在を改めて示している。おそらくこの時期にはすでに、全国的に「河童」に関する伝承が広まりをみせていたと思われる。

『西播怪談実記』(春名忠成、宝暦4(1754)年)には、腕を切られる「河童」が登場した(図4)。挿絵の本文は、ある武家が出している、評判のいい骨接ぎの妙薬の由来についての伝承を綴ったものである<sup>(18)</sup>。本文を要約すると、宝永の頃(1704~1711年)の話で、川辺に繋いでおいた馬を「河虎」が引き込もうとして失敗し、逆に引きずられ、そのうえ武士に右腕(挿絵では左腕)を切り落とされる。すると「河虎」は涙を流して命乞いをしながら、今後は村の住民などに危害を加えないことを約束し、骨接ぎの秘薬の作り方を武士に教えるかわりに切られた腕を



図4 「河虎」(一部)

返してもらふ、という展開である。ここでの「河虎」の形状は、「頭頂部が少し窪み、毛髪が赤松葉のような、大きさは同じくらいだが猿に似て猿ではないもの」である。頭頂部は窪みというよりそこだけ剃っているようにもみえなくもないが、ここでも「河童」は猿に近いイメージであった。この年代は、民間伝承のなかでも「河童」は駒引きに失敗し、腕を切られるといったパターンが普及しはじめる時期でもあった<sup>(19)</sup>。奇しくも、同年には『日本山海名物図会』が刊行され、一方の伝承では人にとり憑いて災いをもたらす要素を持ち、一方ではその欠片もみえずといった伝承が混在していたようである。

紹介した「水虎」を除く3点は、みな猿イメージを持ち、話の舞台が西国であるという特徴を持つ。しかし、18世紀も後期になると、江戸ではそれとは全く異なる様子の「河童」が描かれるようになる。たとえば、江戸時代の妖怪図鑑のひとつ『画図百鬼夜行』（鳥山石燕、安永7（1778）年）に描かれた「河童<sup>かつは</sup>」（図5）である。丸い目、横に大きく広がった口、皮膚の模様やぶよぶよしたような質感、甲羅があることなどから、蛙や亀といった要素をみてとることができる。石燕は「河童」とは別に、全身鱗だらけで、顔が虎に似た「水虎」を描いており、その添書きが『和漢三才図会』と内容が同じことから、描くにあたって参考にしたと思われる。おそらく図1の「川太郎」も目にしてはいるはずだが、「水虎」が鱗模様や構図が類似しているのに対し、石燕の「河童」は、子供ほどの大きさらしいということと、挙げた手の平の形以外は似ていない。石燕が知り得た「河童」に関する情報が、猿に



図5 「河童」（川太郎）（一部）

似ているというものが多ければ猿に似せて描くであろうが、そうではなく、江戸で生きた石燕にとって「河童」とは、蛙と亀を合わせたようなイメージだったということである。

そしてついに江戸にも、「河童」が出たという話が広まった。『耳袋』（根ねざしやしやすやすもり岸鎮衛、天明2（1782）年頃）による

と、天明元（1781）年の8月、仙台河岸伊達侯の蔵屋敷で「河童」を撃ち殺して塩漬けにした、ということがあったそうである。屋敷周辺で子供の溺死が続くことを怪しみ、堀の水を堰き止めて搜索したところ、泥の中に素早く潜り込むものがあり、鉄砲で仕留めたのが図6のような「河童」だったという<sup>(20)</sup>。この「河童」は、一見人間のようでもあるが、甲羅らしきものもある。頭の皿のようなものと放射状に伸びた毛髪がなければ河童とは判断がつかないかもしれない。中村禎里は、「溺死して揚げられた少年の死体をもとにし、これに河童らしき形を混入して描きあげられたのだらう」と推測している〔中村 1996：178〕。話の真偽はともかくとして、図像の面では今まで西国を舞台にしていた「河童」が、江戸を舞台としても描かれるほど注目されるようになってきたということである。



図6 「河童」

さらに、興味深い資料がある。図7は、今まさに「河童」が「尻子玉」を抜こうとしている場面である（『天怪着到牒』<sup>ばけものぢやくとうぢょう</sup>作者未詳／北尾政美画、天明8（1788）年）。「河太郎」は、全身斑模様で痩せているが、かっと見開かれた目や、人間を押さえる姿は力強い。水中が本来の「河童」の活動場所だからであろう。斑模様は蛙や亀からのイメージだと思われる。添書きによると、後ろの亡霊は「河童」に殺された人間で、共食いをしているらしい。この発想は伝承にも他にもなく、絵師独自のものと思われる<sup>(21)</sup>。また、「いろいろのかたちへんじ人をたばかり 川中へ引こみ はらわたをくろふ」とあり、描写はされていないが、そうした「河童は化ける」という特徴も知られていたようである。人間を水中に引き込み、尻子玉を抜いて殺してし



図7 「河太郎」(一部)

まうという「河童」本来の性質ともいうべき恐ろしさが強調されている。

ここまでが18世紀に描かれた「河童」である。西国においては猿をイメージした「河童」が描かれることが多く、一方で江戸では、中期から後期にかけてそれとは異なる亀や蛙のイメージがあらわれはじめるのが特徴である。描かれた場面や性格としては、相撲をとる、駒引きを失敗して手を切られる、尻子玉を抜く、人間に祟るなど、「河童」の性質を意識したものも多い。

### 3-(2) 19世紀から20世紀の図像資料について

では次に、19世紀から20世紀にかけて描かれた図像資料をみていく。19世紀初頭には、「淀川の河童」（『諸国便覧』夾撞山人、享和2（1802）年）と題された、淀川べりを歩いていた武士を、猿に似た「河童」が引き込もうとして失敗し、逆に腕を押さえつけられてしまうという場面を描いたものや、禁漁であるにもかかわらず川狩りをする侍を戒めるために木の根に化けた、蛙と人間を足したような「かつば」を侍が打ち殺し、とり憑かれたというもの（『<sup>かいたんうしみつのかね</sup>怪談四更鐘』素速斎恒成作／百斎画、文化2（1805）年）もあるが、「河童」の描かれ方に大きな変化が起きる。

そのことをあらわしているのが、図8である（『千蟲譜』栗本丹洲、文化8（1811）年序）。丹洲は本草学者で、『千蟲譜』は実在する多くの昆虫や爬虫類などを、分類し、細かな描写の挿絵とともに紹介した図鑑であり、正面・背面・横向きの3方向からの描写が図鑑らしい。添書きにおいて丹洲は、『本草綱目』の「水虎」は亀の類だろうと指摘している。また、豊前豊後に多く、大きさは4～5歳の子供ほどであること、そのあとに「背と腹に甲羅があり、首や手足をその中に縮み入れることができるのは、鼈と異なる」とも述べている。このあたりは、『本草綱目啓蒙』（1803年）を参考している



図8 「水虎」

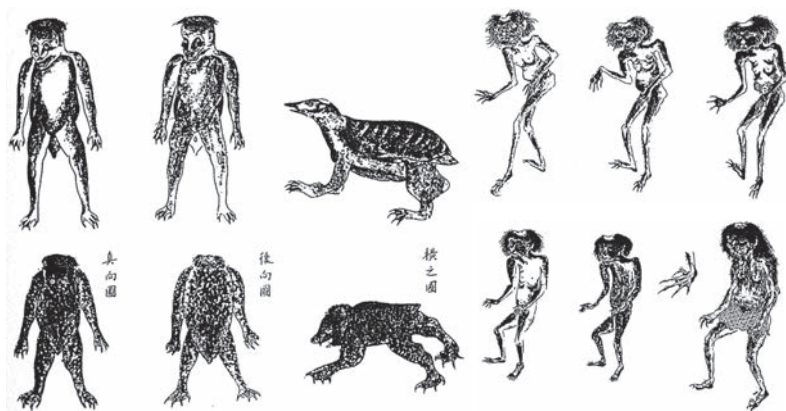


図9 「水虎」

可能性もあるが、この時期には、文献でも図像でも、はっきりとした「河童」イメージが形成されていたことがわかる。図8にもそのとおりに、甲羅がある「水虎」が描かれている。細く突き出した口先からも、亀やスッポンをイメージしたことがわかる。それらに牙はないが、牙を描くことで妖怪らしさのようなものをあらわしたのかもしれない。

続いて図9は『水虎考略』（古賀侗庵編、文政3（1820）年）に掲載された複数の「河童」である。『水虎考略』は、「河童」に関する13点の文献と13点の図で構成されており、いわば「河童専門書」である<sup>(22)</sup>。うち7点（図右側、足の図含む）は、『河童聞合』という、九州日田での「河童」体験談の聞き書きをもとにした図である。九州の伝承では猿に似ているという場合が多いことから、もともと猿に似た絵を用意しておき、それを6人の聞き書き対象者に見せ、話を聞きながら細部を修正し、絵を完成させたのではないかと中村は推測する<sup>(23)</sup>。「河童」はたいていが4～7歳ほどの子供の大きさだが、12～16歳というのもいた。それが図右側右下の「河童」で、まわしを身につけている。この「河童」と相撲をとった小市という人物は、翌日の夕方から翌々日まで寝込んでしまったそうである。それと反対に図左側の6点は、亀やスッポンのイメージが顕著にみられる。左上の正面を向いた2



図10 「河童」



図11 「川童」

点は、耳があり、四肢もしっかりしており、亀やスッポンのイメージにさらに人間の要素が追加されているようにも見える。その右隣は、姿勢や横筋の入った甲羅、鼻の尖り具合などから、スッポンの特徴が色濃くあらわれている。頭頂部の特徴は、毛のないかたちであらわされている。残りの3点は図8『千蟲譜』にもとづくと思われる。ただ、斑模様が甲羅にまで及び、描写も雑である。説明文も『千蟲譜』とは異なるようで、水戸浦で遭遇したという「河童」を描いたものである。『水虎考略』は、猿イメージと亀・スッポンイメージの差異がよくわかる資料であり、この時期は、学者や医師などのいわゆる知識人の間で、こうした「河童」が出回り、転写も繰り返されていたようである。

そしてもうひとつ注目したいのは、「河童」に対するイメージの転換が、図10や図11のような、錦絵の中で起きたことである<sup>(24)</sup>。図10は、『大日本六十余州之内・上総 白藤源太』（三代歌川豊国、天保14（1843）～弘化4（1847）年）である。現在の「河童」のイメージカラーでもある緑色で彩色されたもので、頭の窪みを掴まれ水がこぼれてしまい、狼狽している様子がみてとれる。イメージのモデルとしては、茶色い甲羅らしきものがあると、鋭い爪の様子から亀が考えられるが、尖った口元や、肌の斑点模様など



には蛙の雰囲気を感じられる。

図11『本朝剣道略伝・毛谷村の六助』（歌川国芳、天保14（1843）～弘化4（1847）年）の「川童<sup>かつば</sup>」は、甲羅もなく、蛙のイメージが強く表現されていると思われる。小さく愛らしく、一緒に相撲をとろう、と誘いながら四肢を踏んでいるようにもみえる。人間の側に、恐れの色は全くみられない。

このように「河童」は錦絵にも描かれ、「河童」が人間のさまざまな仕草をまねする姿を描いた図12（『かつばづくし』（遠浪斎重光、江戸時代末期））のような資料もあるほどである。描かれた「河童」たちは体つきも人間に近く、青や緑、肌色などの彩色がされ、表情も豊かで、滑稽さに満ちている。胡瓜が多く描かれていることから、河童の胡瓜好きはよく浸透していたのであろう。

以上が、19世紀（江戸時代末期まで）の図像資料である。19世紀初頭は、18世紀の特徴を受け継ぎ、手を切られたり、人間にとり憑いたり、「河童」の性質を直接描写したものもあった。しかし、本草学者などの間で「河童」に改めて注目が集まりだすと、図8『千蟲譜』を皮切りに、研究対象としてその姿を描くことがはじまった。学者によって描かれた「河童」は、亀やスッポンに似たイメージが強調されており、特に、『千蟲譜』の3点セットと、図9『水虎考略』系の亀・スッポンイメージは、知識人の間では深く根付いたようである。

一方で、19世紀中期には錦絵にも「河童」が登場するようになった。そこでは蛙に似た姿や、それに甲羅をつけたイメージが「河童」として描かれることが多く、また、彩色も緑色でされることが多くなっている。そして蛙イメージの「河童」には同時に、人間に負かされたり、動作のまねごとをさせられたりと、滑稽で愛



図12 「かつば」



図13 「川童」

嬌のある性格も与えられていたのである。学者の研究書に描かれた「河童」と、主に一般庶民のための娯楽であった錦絵に描かれた「河童」では、イメージが分かれたのがこの時代であった。

それから、19世紀中期の錦絵の中に生まれた滑稽で愛嬌のある「河童」

イメージは、時代が進んでも引き継がれた。図13は、『東京開化狂画名所・深川木場川童臭気に辟易』（月岡芳年、明治14（1881）年）で、川岸で釣りをしている人間を襲おうとしたのだろうか、2体の「川童」<sup>かっぱ</sup>が逆に尻をかけられ、1体は体が黄色くなってしまっている。もとの色は緑色で、体格はいいが蛙似である。急いで逃げる姿が滑稽で、「河童」の人間に対する立場は完全に弱くなったことがわかる。だがそれと同時に、人気のある存在であったことが理解できるであろう。その人気は時代が大正、昭和と移っても衰えず、茨城県の牛久沼のほとりに住み、「河童」を描いた小川芋銭（1868～1938）や、芋銭の「河童」を手本とし、その後人間そのもののような生き生きとした「河童」を生み出した、「かっぱ天国」（『週刊朝日』に昭和28（1953）～33（1958）年まで連載（図14））でも著名な漫画家の清水崑（1912～1974）など、「河童」に魅了された人物は多い。そういった雑誌や、漫画、テレビCM（酒造会社の黄桜が昭和30（1955）年にテレビCMキャラクターとして清水の河童を起用）などを通して<sup>(25)</sup>、より多くの人の中で「河童」イメージが共有されるようになったと考えられる。



図14 「かっぱ」（一部）

## 結びにかえて

「河童」の図像資料をたどることで、現在のような一般的イメージの源流は、主に19世紀中期から後期に描かれた錦絵の中にある、ということがいえるのではないだろうか。「河童」のイメージがまとまったのは江戸時代だといわれることは以前からあったが、それがいつ頃、どのようにということを追求した研究は今まであまりみられなかったように思う。

「河童」のイメージの変遷について再びまとめると、以下の表ようになる。

ひとつ目のイメージの転換期は、19世紀の前期から中期にかけてである。「河童」が図像として『和漢三才図会』（寺島良安、正徳2（1712）年序）にはじめて登場して以来は、猿をイメージして描かれることが多かったが、『千蟲譜』（栗本丹洲、文化8（1811）年序）や、『水虎考略』（古賀侗庵編、文政3（1820）年）が著されてからは、知識人の間では亀やスッポンに近いイメージが定着したようである。

ふたつ目は、19世紀中期から後期に描かれた錦絵においてであり、「河童」は蛙に近く、より小さく愛らしい姿で描かれた。それまでにも、蛙をイメー

表1 「河童」図像資料の流れ

	江戸	西国
18世紀		
↓	(後期) 猿イメージとは明らかに異なるイメージ ★亀や蛙がモデルにあると思われる	猿をイメージしたと思われる絵が多い
19世紀		
↓	(前期～中期) <ひとつ目のイメージの転換期> ★知識人の中で亀・スッポンイメージが定着 (中期～後期) <ふたつ目のイメージの転換期> ☆錦絵：蛙+亀イメージ 可愛らしさや滑稽さが表現されるようになる	↓
20世紀		
↓	☆漫画・テレビCM・町おこしなどのマスコットキャラクターとしても登場	
21世紀		

ジしたと思われる図は存在したが、滑稽で愛嬌のある性格が描かれるようになったのは、19世紀中期以降のことである。錦絵は、娯楽として流通させる商品であるがゆえに、よりそのように描かれたのであろう。

ここで疑問に上がってくるのが、なぜ猿イメージから亀やスッポン、蛙のイメージに変化していったのかということである。江戸に現れたという「河童」話の舞台は、治水の行き届いた運河や堀などである場合が多いという指摘もあり<sup>(26)</sup>、都市化した江戸で活動する学者や絵師にとって、猿イメージは受容しにくく、亀や蛙といったより身近な水辺の動物のほうが、イメージしやすかった可能性が考えられる。しかし、江戸に全く猿がいなかったということもなく、西国に猿イメージが多かったように、「河童」についての情報が、そもそも江戸においては猿イメージではなく、亀・スッポン・蛙イメージだった可能性もある。いずれにせよ、この点の検討は今後の課題としたい。また、近現代における図像資料についても、今後の更なる整理が必要である。

## 註

- (1) 本稿は、2009年度日本民俗学会民俗学関連卒業論文発表会における口頭発表：「河童のイメージの変遷について—絵画資料の分析を中心に—」（2009年3月14日発表）を加筆修正したものである。
- (2) 折口信夫1929「河童の話」『中央公論』第44巻第9号（小松和彦編2000『怪異の民俗学』（第3巻）「河童」河出書房新社所収p9～31）
- (3) 柳田國男1936「川童祭懐古」『東京朝日新聞』（柳田國男1968『定本柳田國男集』（第4巻）筑摩書房所収p341）
- (4) 柳田國男1954「河童の話」『日本民俗学』第2巻第2号（小松和彦編2000『怪異の民俗学』（第3巻）「河童」河出書房新社所収p32～39）
- (5) 神野善治1983「建築儀礼と人形—河童起源譚と大工の女牲譚をめぐって—」『日本民俗学』第146号（小松和彦編2000『怪異の民俗学』（第3巻）「河童」河出書房新社所収p75～83）
- (6) 小松和彦1987「河童—イメージの形成—」『週刊朝日百科日本の歴史』第72号（小松和彦編2000『怪異の民俗学』（第3巻）「河童」河出書房新社所収p207～211）
- (7) 若尾五雄1972～1975「河童の荒魂」（抄）『近畿民俗』第56号、第59号、第62号～第64号（小松和彦編2000『怪異の民俗学』（第3巻）「河童」河出書房新社所収p150～206）

- (8) 中村禎里1996『河童の日本史』日本エディタースクール出版部p301～311
- (9) 石川純一郎1985『新版 河童の世界』時事通信社p83～84
- (10) 中村禎里1996『河童の日本史』日本エディタースクール出版部p138～246
- (11) それぞれの出典は、『日葡辞書』（土井忠生・森田武・長南実編訳1980『邦訳日葡辞書』岩波書店）、『書言字考節用集』（神宮司庁編1970『古事類苑』（第48）吉川弘文館（p480）、原文は漢文体であるため要約）、『下学集』（山田忠雄監修・解説1968『下学集』（元和3年版）新生社）、『物類称呼』（神宮司庁編1970『古事類苑』（第48）吉川弘文館）、『本草綱目啓蒙』（小野蘭山著1991『本草綱目啓蒙』（3）平凡社）である。
- (12) 貝原益軒著／益軒會編纂1911『益軒全集』（巻6）益軒全集刊行部p422。『大和本草』は、『本草綱目』を参考しているため、「水虎」についても触れているが、益軒は、「水虎」と「河童」は同類別種だろうと指摘している。
- (13) 中村禎里1996『河童の日本史』日本エディタースクール出版部p44
- (14) 載せられた地方名は、「水虎（カツバ古歌江戸奥州）ガハタラウ（機内九州）カハノトノカハツバ（共同上越後佐州）ガハタロ（京）ガハラ（越前播州讃州）カハコ（雲州）カハコボシ（勢州山田）カハラコゾウ（白子）カハロ（桑名）カハタ（共同上桑名）カダラウ（土州）グハタラウ エンコウ（共同上予州大洲防州石州備後）エンコ（予州松山）メドチ（南部）ガウゴ（備前）カウラハラウ（筑前）テガハラ（越中）ミツシ（加州能州）〔一名〕水唐通雅 水廬同上、」というものであった。（小野蘭山著1991『本草綱目啓蒙』（3）平凡社p183）
- (15) 以下薬品会の説明まで、香川雅信2005『江戸の妖怪革命』河出書房新社p130～132
- (16) 寺島良安著／島田勇雄ほか訳注1987『和漢三才図会』（6）平凡社p159
- (17) 中村によれば、「河童」が文献に登場し、人間や馬を襲い、捕えられれば祟るといふ凶暴性をみせたのは17世紀から18世紀初頭であり、18世紀前半には人に捕えられると、もう危害を加えない約束をして謝罪そして放免、その返礼として魚類を贈与するといった特徴があらわれる。女性と交渉を持ちたがるのもこの時期だという。18世紀後半になると、馬を引こうとして失敗した挙句に手を切られ、そしてそれを返してもらかわりに、手継ぎの秘薬などを伝授するというかたちになる。同時期には、廁に入った人間（特に女性）の尻をなで、手を切られるというタイプも発生したようである。この場合の解決方法も、魚類の贈与や秘薬伝授であるという。（中村禎里1996『河童の日本史』日本エディタースクール出版部p44～53）
- (18) 高田衛監修2003『江戸怪異綺想文芸大系』（第5巻）国書刊行会p435～436
- (19) 註（17）を参照。
- (20) 根岸鎮衛著／鈴木棠三編注1988『耳袋』（1）平凡社p42～43

- (21) この前年まで、天明2（1782）年から続いたいわゆる「天明の飢饉」が起っていた。瘦せた「河童」と共食いをする亡霊は、もしかしたらこれと無関係ではないのかもしれない。
- (22) 『水虎考略』については、詳しくは中村が研究を行っている。（中村禎里1996『河童の日本史』日本エディタースクール出版部p138～246）
- (23) 中村禎里1996『河童の日本史』日本エディタースクール出版部p226～228
- (24) 図10は『白藤源太談』<sup>しらふじげん だものがたり</sup>（山東京伝作・歌川豊国画、文化5（1808）年）の口絵をもとにした錦絵だが、小説本文では、源太と「河童」が接触する場面は特に描かれてはいない。相撲取りである源太と、相撲好きの「河童」という接点だけで描かれたのであり、「河童」の相撲好きが世に広く知られていたことを意味する。一方図11は、剣豪である六助がまだ農夫だった時代に「河童」と出会ったという場面が描かれている。
- (25) 黄桜株式会社ホームページ <http://www.kizakura.co.jp/ja/index.shtml>（2010年10月21日閲覧）
- (26) 中村禎里1996『河童の日本史』日本エディタースクール出版部p56～60

## 図の出典

- 図1 寺島良安著／島田勇雄ほか訳注1987『和漢三才図会』（6）平凡社p159
- 図2 寺島良安著／島田勇雄ほか訳注1987『和漢三才図会』（6）平凡社p158
- 図3 大野桂1994『河童の研究』三一書房p98
- 図4 高田衛監修2003『江戸怪異綺想文芸大系』（第5巻）国書刊行会p435
- 図5 鳥山石燕2005『鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集』角川書店p18
- 図6 根岸鎮衛著／鈴木棠三編注1988『耳袋』（1）平凡社p43
- 図7 アダム・カバット1999『江戸化物草紙』小学館p34～35
- 図8 小西正泰解説1982『江戸科学古典叢書』（41）恒和出版p376～377
- 図9 中村禎里1996『河童の日本史』日本エディタースクール出版部p144、p222
- 図10 国立歴史民俗博物館編2001『異界万華鏡 あの世・妖怪・占い』国立歴史民俗博物館p132
- 図11 緋瀬久里編2008『妖怪カタログ』大屋書房p57
- 図12 国立歴史民俗博物館編2001『異界万華鏡 あの世・妖怪・占い』国立歴史民俗博物館p134
- 図13 兵庫県立歴史博物館・京都国際マンガミュージアム編2009『図説妖怪画の系譜』河出書房新社p45
- 図14 鶴見俊輔・佐藤忠男・北杜夫編1971『現代漫画』（第2期2）「清水崑集」筑摩書房p146

## 参考文献

アダム・カバット

1999『江戸化物草紙』小学館

石川純一郎

1985『新版 河童の世界』時事通信社

大野桂

1994『河童の研究』三一書房

小野蘭山著

1991『本草綱目啓蒙』（3）平凡社

貝原益軒著／益軒會編纂

1911『益軒全集』（巻6）益軒全集刊行部

香川雅信

2005『江戸の妖怪革命』河出書房新社

瀨瀬久里編

2008『妖怪カタログ』大屋書房

国立歴史民俗博物館編

2001『異界万華鏡 あの世・妖怪・占い』国立歴史民俗博物館

小西正泰解説

1982『江戸科学古典叢書』（41）恒和出版

小松和彦編

2000『怪異の民俗学』（第3巻）「河童」河出書房新社

近藤瑞木編

2002『百鬼繚乱 江戸怪談・妖怪絵本集成』国書刊行会

山東京傳全集編集委員会編

1999『山東京傳全集』（第7巻）ぺりかん社

神宮司序編

1970『古事類苑』（第48）吉川弘文館

高田衛監修

2003『江戸怪異綺想文芸大系』（第5巻）国書刊行会

鶴見俊輔・佐藤忠男・北杜夫編

1971『現代漫画』（第2期2）「清水崑集」筑摩書房

寺島良安著／島田勇雄ほか訳注

1987『和漢三才図会』（6）平凡社

寺島良安著／島田勇雄ほか訳注

1989『和漢三才図会』(14) 平凡社

土井忠生・森田武・長南実編訳

1980『邦訳日葡辞書』岩波書店

鳥山石燕

2005『鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集』角川書店

中村禎里

1996『河童の日本史』日本エディタースクール出版部

根岸鎮衛著／鈴木棠三編注

1988『耳袋』(1) 平凡社

兵庫県立歴史博物館・京都国際マンガミュージアム編

2009『図説妖怪画の系譜』河出書房新社

柳田國男

1968『定本柳田國男集』(第4巻) 筑摩書房

山田忠雄監修・解説

1968『下学集』(元和3年版) 新生社